

- ・生徒の実態に合った学習内容を取り扱う。
- ・相対評価ではなく、個人の伸び、特性を評価する。
- ・生徒に、能力に応じた質問をし、どんな方法を使っても指名した生徒から答を導きだし、それを評価する。
- ・高い能力を持ち、授業に満足していない生徒、授業について来れない生徒の双方に、それぞれの達成目標を設定し、個別に課題を与えての指導、学習の習慣を確立させるためにも継続的な指導が必要（授業外での指導）。
- ・前回の中間考査において、部分的に課題を与えた英作文を出題し、型にはまらない発想を重視した。

としている。が、やはり生徒を全体的、平均的視点から捉えた一斉画一的授業から抜けきれず、多様な個に応じることの難しい実態がうかがえる。

3. 個に応じる意義

一斉指導それ自体は、決して否定されるべきものではなく

- ・指導上の経済性
- ・討議指導による思考の深化
- ・社会性の育成

などのメリットを持っているが、一斉指導のこれらの機能を発揮させるためには、少なくとも次のような条件が必要である。

- ・学級全員がほぼ同一の理解力を持つ。
- ・授業の仕方が一方的・画一的でない。
- ・生徒の疑問や発想を生かすような展開で行われる。

しかし、個人差があまりにも大きくなると、一斉指導では対処できなかったり、学習上のつまずきの治療にかえて時間がかかる場合がでてくる。そのような時に、一斉指導に加えて、個に応じる必要が生じる。この一斉画一的な授業を補うものとしての個に応じる指導が、実際の授業の中では可能なのであろうか。

4. 個人差の捉え方

生徒は多様であり、それぞれ個性豊かである。

それだけに、その個性を伸ばすたすけをすることができることは、教師の無上のやりがいであるに違いない。そこで、「個に応じる」の「個」とは何かを考えてみる。個人差を、「達成度としての学力差」、「学習速度・学習の仕方の差」、「興味・関心の差」とすれば、英語の授業の中で、「個に応じる」ことが可能なのは、言語活動に必要な事項を獲得する過程においてであり、また、言語活動そのものの中でのということになる。さらに、「個に応じる」ためには、一斉授業に対し、かなり思い切ったメスを入れ、これまで一様であった学習の目標や内容を、いくつかのレベルに分け、何本建てかにするしかない。例えば、50人のクラスでは50種類のメニューが必要になってくる。しかし、「個性重視」が叫ばれてきた背景をみると、「従来の指導の在り方」が問われているのであり、従来の授業が画一的で、柔軟性に欠けていたことに端を発している。先生方の資料にみられる「意欲の欠如、英語嫌い」等の問題も、その原因は、そこにあるものと思われる。しかし、高等学校において、クラスの一人ひとりのメニューを作り、個に応ずることは不可能に近い。従って、一斉授業の中で個に応ずることを考えなければならぬ。

5. 個を生かす場面

生徒には、それぞれの学習の仕方、思考の方法、興味・関心などがあり、ここでは、生徒の持つ能力を引き出す場を設定してやることを「個を生かす」と考えていくことにする。例えば、一人ひとりが到達度に応じて、学習課題が選択できるようしたり、学習形態をT-T（必ずしもAETとの協同授業を意味しない）にしたり、あるいは、グループ分け（単なる班編成ではなく、個性を尊重したものであることが望ましいし、必ずしも等質でなくてもよい）など授業形態や学習方法に工夫をこらすなど・・・配慮すべき点はたくさんある。

6. 授業の流れ

学習速度、学習の仕方などの言葉は、高等学校ではほとんど話題にしないし、たとえ聞いたこと